

来週の「売り物記事」はこれ



2017年3月10日号

毎日新聞東京本社 編集局・販促宣伝部

支え合った6年 取り残される震災障害者

12日(日)



東日本大震災では関連死が3500人以上認定される一方、被災3県などが震災に起因する障害者として把握しているのは岩手が8人、宮城79人、福島26人とどまります。これは身体障害者手帳の取得者のうち、診断書の原因欄に「震災」や「天災」と書かれていた人をカウントした人数に過ぎず、行政による「震災障害者」の実態把握や支援は進んでいない



のが現状です。中学2年だった宮城県亘理町の縣(あがた)翔さん(19)は震災発生から1カ月半後に自宅に戻り、脳出血で倒れました。幼い頃から暗闇を極度に恐れる子だったといい、一時避難した親戚宅で停電が1週間続くなどした経緯があります。医師は「震災のストレスが一因となった可能性がある」と説明しましたが、診断書では触れていません。右半身麻痺と重度の知的障害が残り、今も言葉が途切れがちな翔さん。被災地の復興が進む中、孤立感を抱きながら懸命に支え合ってきた家族の6年です。

日曜朝は『S』で始まる——。ストーリーにご期待下さい。

「もんじゅ」廃炉で、どうするプルトニウム

米国発の「秘策」があった

夕刊特集ワイド 13日(月)



原発の使用済み核燃料から取り出したプルトニウムを活用する「核燃料サイクル」構想。その中心だった高速増殖炉の原型炉「もんじゅ」の廃炉が決まりましたが、政府はなおも構想にこだわっています。問題は、処分のメドが立たない大量のプルトニウムです。そんな中、プルトニウムの核兵器への利用を防ぐことができる新たな処分方法が、米国で開発された——との情報をキャッチしました。いったい、どんな「秘策」なのでしょう。

健康狂想曲

くらしナビA面 16日(木)から

健康への関心が今ほど高まっている時代はありません。あふれる情報や「健康であるべきだ」という圧力に、どこか息苦しさを覚えている人もいます。あくなき「健康」追求は私たちに何をもちたらずでしょうか。健康をめぐる状況を探る「健康狂想曲」、1月に掲載した「序章・日本人のカラダ」に続いて、「そこまでやるか」という驚きの実態をお伝えします。



朝食を食べよう

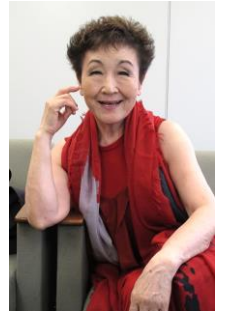
くらしナビA面 15日(水)



「健康のために朝食をしっかりと食べよう」と耳にします。朝食を取ることで意識が覚醒し、生活にリズムをもたらすだけではありません。朝食をきちんと食べる人たちと、そうでない人たちのグループを比較する大規模な実験によって、しっかりと食べる人のほうが病気になるリスクが低いことが、科学的に明らかになりました。朝食が健康に与える影響を紹介します。



落語家の桂米團治さんが各界で活躍する女性たちと対談してきた「粋な噺で行きましょう」。いよいよ最終回を迎えます。大トリのゲストは本紙「Tokiko's Kiss」でおなじみの加藤登紀子さん＝写真。普段は聞き役に徹している登紀子さんが、旧満州で生まれてから歌手デビュー、結婚・出産、美空ひばりカバーに至るまでの人生を語り尽くします。



東京電力福島第1原発の廃炉ロボット

強い放射線、情報不足が開発のハードルに

科学面 16日（木）



東京電力福島第1原発の廃炉作業は、遠隔操作ロボットの活用が切り札になると期待されています。溶け落ちた燃料は冷えて固まっているとみられ、ロボットで切断したり運んだりする作業が想定されます。しかし原子炉内部の強い放射線と、情報不足がロボット開発のハードルになっています。バネや水圧で動く「筋肉ロボット」など、ロボット研究の最前線取材しました。